

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	由谷, 裕哉(Yoshitani, Hiroya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.140- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

由谷 裕哉

まず、ご多忙の折、『サブカルチャー聖地巡礼』の書評を執筆して下さった塚田修一氏に御礼申し上げる。また、過分ともいえる評価をいただいたことにも、心から感謝したい。

リプライとしては、書評の後半に書いて頂いた「なぜ」の問いが不在であるというご指摘に対して、二つほどの例をあげて卑見を述べることにする。

一つ目。茨城県の大洗磯前神社と『艦隊これくしょん』（以下、『艦これ』）のファンとの関係である。本書でも若干触れていたが、2013年4月に開始されたこのゲームのファンが、プレイングキャラクターの一人である巡洋艦那珂に関わって毎年2月17日に同社で行われている忠魂祭に、翌2014年から参列するようになった。この日は、昭和19年に軍艦那珂が南洋で撃沈されたことにより200名以上の乗員が戦死された日であり、同社が那珂の艦内神社であるので毎年この神事を執行してきたのである。本書刊行後になるが、筆者も2015年のこの神事に参列した。ご遺族1組以外に参列した『艦これ』ファンは、全員男性で10名ほどであったが、うち3名が血縁者の中に海軍在籍者か戦死者がいるから参列したと語り（「供養のつもり」と語られた方もいた）、きわめて真摯に神事に参列されていた。

観光学からのコンテンツツーリズム研究から見れば、彼らも『艦これ』というコンテンツの「物語を旅する」ツーリストと解釈されるのかもしれないが、筆者の枠組からすれば、元々彼らが有していた海軍や戦死者に対する思い入れに、『艦これ』に関わる情報が再帰的に作用したのではないだろうか。彼らは、同神社境内の「軍艦那珂忠魂碑」を、海軍もしくは戦死者を表象するもの（聖地）として、慰霊・追悼の目的で訪れた（巡礼した）と考えられる。

二つ目。塚田氏も言及されている汐入（横須賀）、とくに『たまゆら』との関わりについて。筆者は『たまゆら』でメインの舞台背景（ヒロインの沢渡楓、愛称ぽってが高校時代を過ごす設定）となっている竹原市周辺に関して、描かれた場所の全てに巡礼できてはいない。しかし、メインキャラクターの一人である桜田麻音の出身地という設定になっている大崎下島（呉市）には、本書の原稿を仕上げた後の2014年夏に半日訪れたことがある。

『たまゆら』は2010年に発売されたOVAに始まり、本年の劇場版第4部まで続いた息の長いコンテンツであるが、とくに大震災後の2011年秋に放映された第1期では、3回ほど大崎下島が舞台背景として描かれていた。しかし、筆者が同島を訪れた時の印象では、たしかに風光明媚な風景、典雅な街並の地であったが、『たまゆら』ゆかりの地を見て回っている自分は、単にロケ地観光しているに過ぎないように感じた。作品の文脈においては、とくに第1期の麻音朗読会（第11話）のように重要なエピソードと絡んでいる地ではあったが、主人公ぽっての視点に立てば、彼女が麻音の友人・サポート役として関与した場所ではなかったからではない

由谷裕哉「著者リプライ」

『三田社会学』第21号（2016年7月）140-141頁

だろうか。

それに対して、作品全体の語り口から見て竹原と汐入は特別な場所であると思う。とくに汐入の場合、作品に描写された分量では大崎下島より少ない位であるのに、『たまゆら』というコンテンツに思い入れのある人間にとって無視できない場所であろう。そもそも、『たまゆら』は死別を含む別れを描いたコンテンツであり、外見が小学生のようで頼りなさげなヒロインが、その哀しみを乗り越えて前に進むことを描いた物語であると考えられる。汐入と竹原は、それぞれの意味でぼってが父の死を乗り越えて前に進もうと決意をする場所であり、同時に父の思い出に浸ることもできた場所なのである。

さらに、汐入の場合はそれだけでなく、作中でぼっての中学時代までの親友という設定である三次ちひろが暮らす場所でもある。中学時代にぼってがちひろと一緒に訪れた複数の思い出の場所（第1期第1話）を、竹原に移った高校生のぼってが、ちひろに加えて竹原の友人達と再び訪れるエピソード（第2期第7話）は、それらの場所をファンが特別な場所だと認識するのに決定的だったと思われる。劇場版第4部でも再び描かれていたこれらの場所は、大崎下島のケースのような単なる舞台背景とは異なり、ファンにとってコンテンツの語り由来する特別な場所（聖地）を意味するのではないだろうか。

もちろん、横須賀は海軍の鎮守府があった地で、『艦これ』の聖地でもある。ついですが、『たまゆら』の主要な7人の女性キャラクターの「中の人」（声優さん）のうち、4人が『艦これ』にも出演しているので、ファンから見て『たまゆら』と『艦これ』は親和性が高いコンテンツであろう。

上の「中の人」繋がりにはファンの楽しみ方の一つに過ぎないが、横須賀に関してはコンテンツの語り触発され、いくつかの場所をファンが特別な地と（構築主義的に）認識し、行ってみようと思えること、が「なぜ」の答えの一つではないか、と纏めておく。もちろん、同じ場所に繰り返し行こうとするのには別の理由があるものと思われるが、紙数の制約もあるのでこれ以上の考察は控えておきたい。

（よしたに ひろや 小松短期大学地域創造学科）